

ハマスホイとデンマーク絵画

東京都美術館(上野公園) 2020.01.21~03.26

山口県立美術館 2020.04.07~06.07

デンマークを代表する「ヴィルヘルム・ハマスホイ」(1864~1916)は、17世紀のオランダ絵画に影響を受けて、身近な人物肖像、風景、静まりかえった室内に限られた主題を黙々と描いたため、“北欧のフェルメール”と評された。

画伯は、1990年代以降にパリの「オルセー美術館」やニューヨークの「グッゲンハイム美術館」などで次々と回顧展を開催し、2008年には日本でも「国立西洋美術館」で展覧会が開かれて国内美術ファンに強い印象を残している。

デンマークの美術は、19世紀前半は身近な風景に固有の美を見出して“デンマーク絵画の黄金期”と呼ばれる時代を迎え、後半になると画家たちは、近代化により失われつつあった“古き良きデンマーク”の姿を求め、首都から離れて辺境へと目を向けて静謐な「室内画」を追い求めていった。

<本展の見どころ>

2008年に本邦で開催された展覧会からおよそ10年を経て、「ハマスホイ」の作品「約40点」に加え、“デンマーク絵画の黄金期”と呼ばれる19世紀の絵画である「スケーイン派」の美しい作品、さらに世紀末の首都で活躍した画家たちの作品などの魅力のあるデンマーク珠玉絵画に迫る企画である。



ハマスホイ《背を向けた若い女性のいる室内》1903~04年 油彩カンヴァス
舞台は、画伯が1898年~1908年まで過ごしたコペンハーゲンの旧市街ストランゲーゼの住居で、「370点ほど」の作品の3分の1が当所で制作された。

ハマスホイ《若いブナの森、フレズレクスヴェアク》1904年 油彩カンヴァス
コペンハーゲン郊外の自然を描いた風景画のひとつで、木立の隙間からこぼれる穏やかな光は、室内画にも共通する画伯の作品の重要なテーマである。